
I am YOU

芹沢遥子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I a m Y O U

【Nコード】

N 1 4 7 3 I

【作者名】

芹沢遥子

【あらすじ】

陸上部に所属する、現在14歳の私、富永侑香。

ある日目が覚めると、見たことも無い部屋に寝かされていた。わけもわからず混乱する私。

しかし、そこへいきなり告げられた一言。

「お前は三日前、ここで殺人を犯し、脱走した死刑囚だ。」

見覚えのない罪、見覚えのない場所。

一体、私に何があったのか・・・？

エピソード、1 記憶、2 囚人（前書き）

ところどころ文章が読みづらかったり、
意味不明になっている部分が出てくるかもしれませんが、
そこは初心者が書いたものと思って、
温かい目で見守ってください＞＜

エピソード、1 記憶、2 囚人

くプロローグく

変な夢を見た。

私は走っていた。

見たことも無いような知らない場所を、たった一人で。
辺りは暗くて、何も見えなくて・・・。

私はそんな中を、全力で疾走していたー！。

怖くはなかった。

というより、私は不思議な解放感に包まれていた。

爽やかな風を全身に受けるような、そんな不思議な解放感だった。
汗ばんだ額に髪が張り付いても、

息がどんどん荒くなってきても、

私を包む解放感が消えることはなかった。

しばらくして、私は気づいた。

ーー一体、私はどこまで走っているのだろう・・・？

私が覚えているのは、そこまでだった。

く1、記憶く

「んく・・・っ！」

目が覚めると私は、どこかの尋問室のようなところにいた。
部屋全体が薄暗くて、不気味な部屋。

もちろん、一度も見たことが無い部屋だ。

部屋の真ん中には大きな机と、数個の椅子が並んでいた。

私はその部屋の端にある、質素な簡易ベッドに寝かせられているようだった。

「ようやく目が覚めたか。YUKA516。」

「・・・？」

気がつくと、目を覚ました私の前に、数人の見知らぬ男が立っていた。

「・・・??」

寝起きでぼんやりしていた私の頭が、次第に冴えてくる――。

「え？ちよっと待って・・・。ここは？」

昨日の夜まで私は、確かに私は自分の部屋で眠っていたはず。家族におやすみと告げて、

ベットに身を沈めて眠りに入ったことまでは覚えている。

なのに、目が覚めた私が今いるのは不気味な、知らない部屋。

（ここはどこ？なんで私はこんなところにいるの？）

私は混乱した。

「え・・・ねえ、お母さんは？お母さんは？」

「何を言っているのだ？YUKA516。」

「ちよ・・・ちよっとまってよ。その前に、ここはどこ？」

私は身を起こし、きよろきよろとまわりを見渡した。

目に入るのは汚らしい床と壁、いくつかの家具のみ。

見たことのあるものは何も見当たらない。

全然知らないものばかりだ。

「何で・・・？何で私、こんなところにいるの？あれ・・・？」

「YUKA516？とぼけたって無駄だぞ。貴様は・・・」

「ねえ、何で私、こんなところにいるの？ねえ。」

私は男たちに向かって必死に聞いた。

「お母さんは？お父さんは？うちはどこ？ねえ！教えてよ！」

「・・・」

男たちは私の強い言動に困惑しているようだ。無言で何も答えない。

「ねえ。教えてよ!」

私が何度も強く聞くと、男たちの一人が困ったように聞き返した。

「何も・・・覚えていないのか・・・?」

「え・・・いや・・・」

私は、男の重々しい口調に、つい言いすぼんでしまった。

「やはりあの時のクスリが・・・」

「いや、しかし記憶障害などと・・・」

男たちがヒソヒソと話しているのが聞こえた。

(いったい・・・私に何があったの・・・?)

急に心配になってきた。

すると、男たちの一人が私の目を見てきっぱりと告げた。

「貴様の名前はYUKA516。三日前、ここで殺人を犯し、脱走した死刑囚だ。」

「死刑囚・・・私が・・・」

頭の中が真っ白になった。

（2、囚人）

数日経つと、私もようやく自分が取り巻かれている状況が詳しく分かってきた。

どうやら私は男の言うように本当に死刑囚、囚人のようだった。

それは、私に対する扱いでなんとなく分かる・・・。

私はあの後すぐに手足を拘束されて、

問答無用で服を囚人服に着替えさせられ、

今は牢に入れられている。

こんな酷い扱いをされたのは初めてだと思う。

ここにいる人たちの中では、私が本当に記憶を失ってしまった

と信じてる人が半分。

私が全て演技をしていると思ってる人が半分のようだ。

（私がそんな上手い演技できるわけ無いじゃん）

と心の中でつつこみつっ、

私は今、反省しているような表情を浮かべながら、

一日三回の食事を楽しみに時間を過ごしていた。

食事といっても、パンと少しの牛乳しか与えられないのだが、

変化が無い毎日の中、一日三回の食事というイベントは私にとって
ちょっとした楽しみとなっていた。

といっても、私は何で自分が死刑囚となったのかが全く分からない。
目が覚めたらここにいて、いきなりこうなったのだ。

最初は発狂したいほどだったが、

ここで叫んでもどうもならないと思い直した私は、ここで今、廃人
のように過ごしている。

「おい、YUKA516！食事だぞ。」

しわがれたこの声は、看守のガートさんだ。

いつも思うけど、このYUKA516ってのは私の名前なのだろう
か・・・？

私は確かにゆうかだけど、

富永侑香っていうちゃんとした名前がある。

YUKA516なんて、人間の名前じゃない。機械の名前みたいだ
と思う。

「おい！YUKA516？」

ガートさんが呼んでいる。

「あ、はい！」

私は即座に返事をして、ガートさんが牢まで持ってくるお盆を期待
を抱きつつ見た。

もちろん内容は、

ーいつも通りのパンと牛乳。

はぁ・・・と浅くため息をつき、私はお盆を受け取った。

「YUKA516！不満かね？」

ガートさんが聞いた。

「え？いや、不満ってわけじゃないんですけど、メニューがいつもどおりだな〜って・・・」

私は皮肉を込めて言った。

「不服を言うな。囚人に食べさせるものなぞに凝る必要はないだろう。」

ガートさんは私の皮肉を軽く受け流す。

「そもそも私がなんで囚人なんですか？私は何も・・・」

ムツときた私は今までの不満を込めてガートさんに問うた。

「わしだってそんなことは知らん。確かにお前さんのことは可哀想だと思うが・・・」

わしにはどうしようもないんだ。」

ガートさんの表情が悲哀を込めたものとなる。

私だって分かっていて。ガートさんに聞いてもどうしようもないことなんて。

ガートさんはとても優しい、純粋な人だ。

ここにいる囚人たちの愚痴も相談も、罵りも、毎日毎日丁寧に全て聞いている。

囚人達の昔話に腹を抱えて笑うし、時には涙することもある。

そんなガートさんに私に蓄積された不満をぶつけたってガートさんを悲しませるだけだ。

でも、不満をぶつけずにはいられなかった。

誰かに私の欲求不満を預けてしまいたかった。

もしかしたら、ここにきて私は心がすさんでしまったのかもしれない・・・。

ふと、そう思った。

「YUKA516。よく食べるんだぞ。」

ガートさんはそう言って、食事を置いて去っていった。囚人みんなに食事を運ぶ……。多忙なことだ。

私は食事を終えた後、またいつものように暇を持て余さなくてはならなくなった。

ガートさんとあの後、長時間喋ってても良かったのだが、さっきの少し気まずい雰囲気のまま話すのは辛かった。

それに、ガートさんはもう行ってしまった。今更どうしようもないことだ。

けど、ガートさんと話して、やっぱり不可解に思うのは、何故私がこんな場所に幽閉されているのかということだった。

記憶を辿ってみる。

あの日。私がここに来る前の日のことだ。

「侑香。おはよう。」

その日の朝も、いつも通りはなしかけてきたのは、私の彼氏、榊だった。

「あ、おはよー！榊。」

榊というのはもちろん名前じゃない。

苗字だ。みんながそう呼ぶから、私もそう呼んでいた。付き合い始めてからも。

「榊って呼ぶなって言っただろ？それじゃ、俺らカップルじゃないみたいじゃん！」

俺の名前はゆ・う・や！ちゃんとゆうやって呼べよ！」

「はーい。以後気をつけまーす」

私はそう言って笑った。

つられて、榊も微笑む。幸せなひとときだ。

私が榊と付き合い始めたのは半年前だった。

それまでは、同じ陸上部で榊と何度か話したことはあったけれど、顔しか知らなかった。名前は分からなかった。

だから、半年前、榊に告られた時はすぐびっくりした。

互いに共通の友人を通じて、メールのやり取りから始まって、今はもう一緒に登下校する程の仲にまでなっていた。

「あー、今日も服装チェックだって。厳しいな。」

「榊みたいなバカが毎日懲りずにワークスつけたりするからでしょ。」

「バカってなんだよ！俺だって毎日髪に1時間もかけてんだぜ？」

「そんなことに時間を使うのがバ・カってもんよ！」

「あ、今のヒドーイ」

榊という時間が、私にとって一番幸せな時間だった。

話が楽しくて、どんどん進んでいくからだ。

「んじゃ、また帰り！」

「うん！またね。」

校門につくと、私たちは分かれて、それぞれの教室へと向かう。

その日お互いに手を振り合って、私たちは分かれた。

それが、榊を見た、私の最後だった。

榊が所属している男子陸上部は基本的に毎日放課後練習がある。それに比べて、私の女子陸上部は練習は週4回と決まっていた。

付き合い始めて最初の頃、榊の練習が終わる時間まで待つと言った私に、榊はこう言った。

「女を遅くまで待たせるわけには行かない。」

これからは部活がかぶった時だけ一緒に帰ろう。」

優しい榊はそう言って、私を帰した。

その日も榊は部活。

私は部活がなかったから、授業が終わった後、私は友人達と一緒に先に帰ったのだった。

「最近榊とはどうなの？」

「え。いやー、普通かな。」

「まじで？つーか、デートとか行ってるの？」

「侑香って意外とやるよねー」

「そうそう！分かる！積極的というかー！もうキスとかしたの？」

女の友人たちのことが、私はあんまり好きじゃなかった。

なんというか、うざったいのだ。

口を開けば恋愛かテレビ、芸能人の話ばかり。

私との話もほぼ榊とのことだけだった。

「してないよー！！榊とはそんな関係じゃないし・・・」

私がそう答えると、友人達は口を揃えて、

「えー！まじ？」

と大袈裟にびっくりした反応をするのだった。

その後の質問攻めを適当に受け流すと、私はどっと疲れた気分になっていた。

これも毎度のことだった。

今思うと、私は毎日に疲れていた。

榊と話しているとき以外に楽しい時間は無かったし、

特に友人たちとの会話は大嫌いだ。

こうやって話をする時間があるくらいなら、

榊ともっともっとおしゃべりしたい。

家でゆっくり寝ていたい。

ふと、そんなことを考えていた。

「ねー、侑香、聞ってるの？」

「え？」

「さっきからずっと話しかけてんだけどー」

気づくと友人たちが皆で、私の顔を覗き込んでいた。

「あ。うん。ごめん。ちょっと考え事してて。」

私は焦って答える。

「うっわー！！どーせ彼氏のこと考えてたんでしょ？」

「きゃー！侑香ったらー！」

（・・・・・・・・）

私は呆れて何も言えない。

「ほらー！照れちゃってえー！」

「黙ってスルーなんて許さないぞお！」

黙っている私を見た友人たちはそう言って笑う。

仕方なく、私も浅く笑った。

友人達と分かれ、私が家に着いたのはもう夜の6時をまわったときだった。

「ただいま。」

返事がないことは分かった。

でも、ただいまと言う事で、家に帰った来た実感を得たかった。

私の両親は共働きで、いつも夜遅くまで帰ってこない。

兄弟はいないから、私はまあ、一人暮らしみたいなものだ。

けど、イヤな気持ちはいらない。

（だって、姉とずっと電話してられるから・・・。）

姉は家の都合で両親と離れて、一人でマンションに住んでいる。

大変？って聞いたことがあるけど、姉は大丈夫って答えたっけ。

両親が共働きの私と一人暮らしの姉はお互いに、家では一人にいる

ことが多いから、

しょっちゅう連絡を取り合っていた。

毎日夜8時になると、姉から電話がかかってくる。

その日の夜もそうだった。

トゥルルルルル。

いきなりの電話の着信音に私は即座に反応し、受話器を取った。

「はい。もしもし。富永です。」

「あ、侑香？俺。」

「榊？部活終わったの？」

「うん。さっき帰ってきたところ。」

榊の声を聞くと、いつも私は安心する。

落ち着いた、とても聞きやすい声で話すのだ。

「そうなんだー！お疲れ様。」

その後も、会話はどんどん進んだ。

クラスメイトのこと。先生のこと。部活のこと……。

私と榊は、その夜もたくさんのかんことを話した。

話が途切れることはなかった。

話はぽんぽんと弾んだし、

榊は話が上手だからだ。

しばらくたつと、楽しい時間はすぐに過ぎ去ってしまっていた。

時計を見ると夜の11時。そろそろ両親が帰ってくる頃だ。

「ごめんねー！そろそろ切らなきゃー！」

「あ、りょーかい。じゃ、また明日。」

「うん、ばいばい。」

「おやすみー」

ツー、ツー、ツー。

電話が切れた。そつと受話器を置く。

榊の声を聞いたのは、それが最後だった。

その後のことは特に覚えていなかった。

お風呂に入って寝るだけだったし、何かあったわけでもなかった。
その夜、普段どおりに布団に入って起きたら・・・ここにいたのだ。

（んゝ・・・。）

私はまた悩むことになってしまった。

思い当たることが何もなかったのだ。

昔、何かの本で、目が覚めたら知らない場所にいたという話を読んだことがあった気がする。

アリス・・・だったっけ？

確か、全部夢だったっていうオチだったはず。

ためしに頬をつねってみるが、

鈍い痛みがはしるだけ。

（やっぱ夢じゃないかー。）

軽いため息をつく。

ふと、榊のことが頭に浮かんだ。

（いきなり私がいなくなって、榊、心配してるかな？）

家族や友人はどうでもいい。

というか、あの人達と離れられて、内心嬉しかった。

でも、榊は別だった。

榊と離れてもう数日も経っている。

今までしばらく、榊と毎日会っていたから、

少し会わないだけですごく物寂しく感じる。

（榊、どうしてるだろーな・・・。）

ぼーっと、榊の顔を思い描いてみる。

顔だけ見て、整った顔立ちの美少年といわれればその通りなのだが、
榊は格段モテていたわけではなかった。

どこか、ミステリアス雰囲気が漂っていたからだろうか。

基本的に明るい性格の榊だが、何となくみんなと違うオーラがある
のだ。はっきりいって、近づきづらい。

少し、大人びている・・・ということなのだろうか。

男子からも女子からも、一目置かれていた。私にはよく分からないけど、榊にはそういう不思議な雰囲気の人だった。

「ねえ。早くここから出してよ。」

私が一人で色々と考えていると、どこからか声が聞こえてきた。ここの牢にいるほかの囚人達のうちの一人だろうか・・・。

「ねえ。出してよ。」

同じ年くらいの、若い少女の声だった。

「出してってば。」

少女が何度も呼びかけると、

「ん？なんだ？うるさいな。」

とガートさんがうっとおしそうに答えたのが分かった。

「ここから出してっていつてんの。」

少女はガートさんが自分の声に気づいたのを知ると、強く怒鳴るような口調になった。

「ダメだ。お前には窃盗と文書偽造の疑いがかかっている。

疑いが晴れるまで、出すわけにはいかん。」

「チッ」

舌打ちが聞こえた。あの少女のものだろう。

「あいにく、明日がお前の裁判だ。それまでおとなしくしてるんだな。」

「え？あたし、明日なの？ラッキー。」

少女の口調がまた変わった。

今度はとても嬉しそうだ。

「明日はお前以外に3人の囚人の裁判を予定している。お前は2番目だ。」

「あーい。」

少女はおとなしく黙ったようだった。

すると、ガートさんが私の牢のほうにまで近づいてきた。

「YUKA516・お前も明日が裁判だ。まあ、お前は1番だがな。」

「え?」

裁判・・・?

私の怪訝そうな顔をみたガートさんは優しく微笑んだ。

「お前が何も覚えとらんってことで、事務局の方がお前の罪を再調査することになったのさ。」

「本当?」

思っても見なかった一言だった。

もしかしたら、ここから出られるかもしれないのだ。

ここから出たら、榊・・・いや、みんなのもとに帰れるかもしれない。

もう、こんな場所はこりごりだった。

「あ、ありがとう。」

「いや、わしに言われても困るんだがな・・・。」
ガートさんが苦笑した。

「あ・・・そっか。」

「まあ、明日まで、ゆっくり休んどけ。」

ガートさんはそういって、
どこかへ去って行ってしまった。

「ねえ?」

さっきの少女の声だった。

「ねえ? きいてる?」

「え? 私?」

どうやら、少女は私に呼びかけていたようだった。

「そう。あなた。きこえる?」

牢の中で、少し低めの少女の声が響いていた。

「うん。聞こえる。」

「あんた、どうしてここにいるの？」

少女の問いに、私は何も答えられなかった。

「・・・・・・・・。」

「そう。言いたくないのなら別にいいわ。私はね、盗みよ。それと偽造。」

「盗み？」

「人の話には口を開くのね……。まあいいわ。」

そう。盗みよ。私は盗んだのよ。」

少女の話に、私は少し興味をそそられた。

「何を盗んだの？一体何で？」

「ん？聞きたいの？」

「うん……。」

「いいわ。教えてあげる。」

私はね、人の物を盗んで暮らしてた。

服も、食べ物も、お金もね。

少し前には車をかつぱったわ。

もちろん免許証とかも全部人の使ってた。

ついに検問所でバレちゃってさ。そのままここにつれてこられちゃったの。」

少女は自虐的に笑った。

「ふふ。馬鹿みたいよね。」

「・・・・・・・・。何で、そんなことを？」

つい、私はそう聞いていた。

「退屈だからよ。」

「退屈？」

「別に、貧しいわけじゃなかったわ。親はいなかったけど、暮らしには困らなかつたし……。」

でもね、同じような毎日をただすごすだけっていうのがイヤだった

の。

だから、家出してやったの。2年前にね。」

少女の話を、いつの間にか私は引き込まれていた。ぶっきらぼうな口調だったが、少女の話はどこか面白かったのだ。

「家出なんかして、大丈夫だったの？」

「大丈夫じゃなかったわよ。家もないし、お金も着るものも何もないのよ。」

まあ、でも後悔はしてないわ。だって、毎日が違うの。新鮮よ。」

「新鮮・・・？」

「そう。食事だって、寝床だって、毎日違うのよ。」

何も食べれない日もある。でもね、世界が広がったわ。

親切にしてくれたホームレスのおじさん。毎日パンをくれた優しいパン屋さん。

あの人たちと出会っていなかった頃の私は、心から不幸だと思うの。」

少女の話は、私には少し難しかった。

けれど、どこか共感できるものがあった。

「私も分かるなー。実は私もね、毎日に飽きてた。」

楽しいことっていえば、彼氏と毎日会うことくらいだったし。

だから、ちょっと羨ましいかな。顔も名前もしらない貴方のことが。」

「ありがとう。何だか嬉しいわ。私はリカ。よろしくね。」

リカさん・・・。少女の名前を何度も脳内で反芻する。

すると、リカという名前が、ずっと昔からの親しみのある名前に思えてきた。

「いい名前。私は侑香。ここではYUKA516って呼ばれてるけど・・・。」

「侑香ね。分かったわ。」

それから、私とリカさんは夜遅くまで語り明かしたのだった。

エピソード、1 記憶、2 四人（後書き）

感想等があればお書き下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1473i/>

I am YOU

2010年10月11日22時58分発行